

特

集

果樹カメムシいま・むかし

## 果樹カメムシ類の発生量，飛来時期予測に使われる調査方法について

福岡県農林業総合試験場 <sup>いたみ</sup>伊丹 <sup>はるい</sup>春衣・<sup>しみず</sup>清水 <sup>のぶたか</sup>信孝

## はじめに

果樹カメムシ類とは、果樹の果実を吸汁加害するカメムシの総称であり、主にチャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシの3種が挙げられる(図-1)。チャバネアオカメムシは全国的に分布しており、ツヤアオカメムシは西日本、クサギカメムシは北日本で多い。これら主要3種はいずれも広食性であり、餌として吸汁する植物としてチャバネアオカメムシではカンキツ、ナシ、カキなどの果樹や、スギ、サクラなどの一般樹木まで100種以上が記録されている(安永ら、1993)。加害された果樹果実は、吸汁された部分が凹んで陥没し水浸状やスポンジ状となるほか、ひどい場合には落果するなど、収量や品質に大きな悪影響を及ぼす(図-2、3)。

現在、果樹カメムシ類の防除対策は化学薬剤を用いた化学的防除が中心であるが、果樹カメムシ類は年や地域によって発生量や飛来時期が大きく異なるため、防除実施の可否やタイミングを計ることが難しい。よって、防除対策を構築するために果樹カメムシ類の発生量や飛来

時期の予測を行うことは大変重要である。

本稿では果樹カメムシ類のうち主要3種カメムシの発生生態について紹介するとともに、主にチャバネアオカメムシを対象とした果樹カメムシ類の発生量および飛来時期の予測として実施されている調査方法を福岡県での事例を基に紹介する。

## I 果樹カメムシ類の発生生態

果樹カメムシ類は多くの種で年1~2回の発生である。越冬は3種とも成虫態で行い、越冬場所はチャバネアオカメムシが常緑広葉樹の落葉下、ツヤアオカメムシが常緑広葉樹の樹冠内、クサギカメムシが軒下や家屋内、大木の樹皮下などである。越冬した果樹カメムシ類は春から秋にかけて様々な植物を吸汁しながら移動する。このうちチャバネアオカメムシは4月ごろからサクラ、クワ、キリなど様々な樹種を転々とし、7月ごろには本種の主要な繁殖植物であるヒノキやスギへ移動する。そこでヒノキやスギの球果を餌としながら繁殖し、球果が豊富であれば10月ごろまで生息する。晩秋になると越冬場所



図-1 果樹カメムシ類の主要3種(左:チャバネアオカメムシ, 中:クサギカメムシ, 右:ツヤアオカメムシ)

Survey Methods Used to Predict the Abundance and Timing of Arrival of Stink Bugs Infesting Fruits. By Harui ITAMI and Nobutaka SHIMIZU

(キーワード: 果樹カメムシ類, 飛来時期, 発生量, チャバネアオカメムシ, 予察)